英語学・英語文学研究と小学校英語教育の接点
―免許認定講習での実践を通して―

奥村　真紀・児玉　一宏

English Linguistics, English Literature, and Elementary English Education
― Insights from Teaching License Courses ―

Maki OKUMURA, Kazuhiro KODAMA

教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要

第２号 （2020年３月）

Journal of Educational Research
Center for Educational Career Enhancement

No.2（March 2020）

英語学・英語文学研究と小学校英語教育の接点

―免許認定講習での実践を通して―

奥村 真紀・児玉 一宏

（京都教育大学）（京都教育大学）

English Linguistics, English Literature, and Elementary English Education

－Insights from Teaching License Courses－

Maki OKUMURA　Kazuhiro KODAMA

2019 年 11 月 29 日受理

抄録：本稿では、執筆者各々が、英語学および英語文学という教科専門の立場から、免許認定講習での実践を通して得た認識を基に、小学校英語教育に携わる教員にとって必要と思われる英語観、指導上の視点について考察するとともに、英語学研究および英語文学研究の知見を小学校英語教育にどのように活用することが、効果的な指導の一助となるかという問題について、英語指導者の視点に立ち検討を加えた。英語学の視点からは、ことばの不思議さ、ことばについて思索することの面白さへの「気づき」が、英語学習者に自己効力感を生むという意味で、英語教育に限らず児童の成長全般に多大な影響を及ぼす要因となると論じ、英語文学の視点からは、ナーサリー・ライムを教材として、音声指導や語彙指導だけでなく、異文化理解や深い他者理解につながる英語指導の在り方を考えた。

キーワード：気づき、自己効力感、ナーサリー・ライム、異文化理解

Ⅰ．はじめに

京都教育大学では、2016 年度から 3 年に亘って「小学校英語教科化に向けた専門性向上のための講習の開発・実施事業」を実施し、2020 年度からの小学校英語教科化に向けて、京都府・京都市の現職小学校教員が専門性を高め、中学校への英語指導との接続を踏まえた英語指導が可能になるよう、知識・技能の向上を図ることに努めた。[注1]

小学校の新学習指導要領（2017 年告示）では、かつて英語活動において「コミュニケーションを図る素地」と記されていたものが、教科としての英語では「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力」と文言が書き改められた。さらに、「聞くこと、話すこと」に「読むこと、書くこと」が追加されている。小学校でもコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することを目指して、児童は４技能を学ぶことになる。[注2]「小学校学習指導要領 第２章 外国語 第１目標」では、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力をどのように育成するかが明記されている。

(1) 外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語の違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。
(2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。
(3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者を配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

(1)の記述からは、外国語としての英語を学ぶ本質的な意義が示されていることが分かる。次に、(2)からは、学習した内容を情報として交換したり伝え合ったりするだけでなく、日常生活における具体的な場面や状況で適切な言語使用ができることも求められていることが窺える。最後に、(3)からは、「異文化間能力」(intercultural competence)としての社会的・文化的言語能力の育成も求められているといえる。

新学習指導要領で示された今後の小学校英語教育を推進するうえで、英語学・英語文学研究の成果をどのように活用することができるかという問題、換言すれば、小学校英語の指導者に対して、英語学・英語文学はどのような知見を提供できるかという問題に焦点を当て、以下では、本学で実施した「小学校英語教科化に向けた専門性向上のための講習の開発・実施事業」での講義および教育実践の内容を振り返り、考察を加える。

Ⅱ. 英語学研究との接点

1. 講座内容

「英語学」の講座では、主として小学校の現職教員を対象に、英語学の基礎概念、英語学的な思考法や英語の分析方法について講義するだけでなく、英語教員として、言語現象の背後に存在する何らかの仕組みや規則性を理解することの大切さを教授した。英語学の研究成果を英語教育・英語指導に活用する可能性があるとすれば、それは「ことばの不思議さ、ことばについて思索することの面白さ」への「気づき」(awareness) であると考えられる。

英語学習において、児童が英語コミュニケーション力の基礎を身に付けるためには、いかに優れた指導と教材が提供されるとしても、学習者自身による自律的な学習の結果としての自己効力感が存在しなければ、外国語としての英語の習得には多くを期待できないと考えられる。指導者の視点に立つと、教員自身が英語の仕組みや規則性を正しく理解しようと努める情熱がなければ、英語の面白さや奥深さを学習者自身に気づかせることは困難であろう。また、学習者である児童にとって、「やればできる」という自己効力感に裏付けられた成功体験が欠かせないことも確かであろう。児童の自己効力感を育成するために、ひいては自律的な英語学習への道を切り拓くためにも、ことばに対する興味・関心の拡張、拡散を促す指導が求められる。

本講座では、英語の指導者自身が小学校英語教育に対する旺盛な問題意識をもち、「ことばの不思議さ、ことばについて思索することの面白さ」への「気づき」の大切さを教授するため、英語学の諸相（主として、音韻論・統語論・意味論・語用論）について、小学校英語教育と関わりの深い言語現象を取り上げて、専門的見地からの講義を実施した。紙幅の制限があり、本稿では、特に wh 疑問文と want to 不定詞、fun の用法を取り上げて、到達目標および問題の所在を明らかにするとともに、英語教育への示唆について考察を加える。

2. 到達目標

1) wh 疑問文と want to 不定詞

小学校段階では、言語材料として、基本的な wh 疑問文に加えて、次のような言語材料の習得が目標とされている。

(1) What sport do you like?
(2) What do you have on Monday?

いずれの文でも、疑問詞 what は動詞（like および have）の目的語位置から文頭へ移動している。[注3] ただし、次のような wh 疑問文の場合には、文構造についての一定の理解が不可欠である。

(3) What do you want to be?
(4) What club do you want to join?

コミュニケーションの実用性、機能的側面を考慮した学習内容として want to 不定詞を含んでいる点に特徴があり、新学習指導要領の目標と整合しているといえるが、文構造の理解という点では少々難であるといえる。学習者は、文頭の what および what club が後続の不定詞節中からの移動によって文頭に位置していることを理解する必要がある。解釈の上では、what および what club は元の位置に戻し、不定詞節中の動詞と結合させる必要がある。以上の例文と構造的には類似しているが、解釈の上で注意を要するタイプの表現も散見される。例えば、次の(5)および(6)がこれに相当する。

(5) What team do you want to win?
(6) Who do you want to win?

いずれの例文においても、what team および who は後続の不定詞節中からの移動によって文頭へ位置したのではなく、want と to の間の位置、すなわち want の目的語からの移動なのである。したがって、例えば、(5)の正しい解釈については、「どのチームに勝ってもらいたいと思いますか」であり、「どのチームに勝ちたいですか」ではない。このような正しい解釈に辿りつくためにはどのような視点が必要となるであろうか。これについては後述する。

2) fun の用法

fun は小学校段階で導入される基本語彙であり、次のように述部を構成する表現としての使用頻度が高い。

(7) Tennis is fun.

fun には「楽しい」という訳語が割り当てられて指導されることが多いが、程度表現としての修飾語が付けられると、文法性の点では次のような分布が得られる。

(8) a. *Tennis is very fun.
b. Tennis is {a lot of / great} fun.

(8a) にはアステリスクが付けられていることから、文法的に容認されない文である。「テニスはとても楽しい」という内容を表現するためには、very ではなく a lot of や great を使用する必要がある。では、なぜ(8a)のような表現は、一般に、容認されない文になるのであろうか。この点を理解することは fun の語法を正しく理解する上で重要であるが、それ以上に強調しておきたいことは、fun の誤用の原因を分析することで、語彙指導に資する重要な視座が得られるということである。

3. 英語学を活用した授業実践

到達目標に対してどのようにアプローチすればよいかという視点に立ち謎解きをすることにする。

1) wh 疑問文と want to 不定詞

want to 不定詞では、to に後続する動詞が目的語を取る動詞（他動詞）であるか否かが重要である。(5)の例では、win は表層的には自動詞の可能性も他動詞の可能性もあるが、他動詞 win には、目的語に対する選択制限（selectional restriction）が課され、競争相手など「人」を表す名詞句を目的語に取ることができない。換言すると、「勝利する」という意味で使用される win は自動詞でしかなく、「〜に勝利する」という意味で win を使用することはできないということである。選択制限を意識しないで動詞の意味だけを覚えると、日本語と同じ発想で英語も使用できると思い込む危険性があるため、少なくとも英語指導者には選択制限の重要性を強調し、具体例とともに十分な理解を促した（事実、win の選択制限を学習して驚きの感想を述べた教員も少なくはなかった）。

このような win の選択制限により、(5)では、which team を want と to の間の位置において解釈せざるを得な

いことになる。これによって、win は自動詞として機能することになり、結果として「どのチームに勝ってもらいたいと思いますか」という正しい解釈が得られるのである。

2) fun の用法

(8a)は very という副詞が付加されたことによって容認されない文になっている。これは、fun が形容詞ではないことの証左である。(8b)の文法性が示しているように、fun には、a lot of や great のような形容詞の働きをする語句が付加される。この観察から、(8a)のような be 動詞の補語位置に現れる fun は名詞、しかも不加算名詞であることが分かる。品詞に対する理解があやふやであると、英語学習の初期段階では、特に訳語にのみ依存する傾向が見られるため、思わぬ誤解をしていることがあることを指摘しておきたい。fun の用法については X is fun. や X is a lot of fun. のような形式を繰り返しインプットすることで、明示的な文法指導を回避するとしても、学習者の心内辞書に「項目依拠構文」(item-based construction)[注4]として、自然に定着させる効果が期待できる。

4. 考察

小学校での英語指導においては、「文及び文構造」の指導は明示的な統語論的分析に依拠することなく、「語、連語及び慣用表現」と同等に扱われ、表現形式の意味や機能の理解のみが求められることになる。しかし、英語の習得には、文構造の理解、動詞に関する自他の区別、品詞の理解などが必要である。小学校段階で英語を指導する際に児童に分析的な説明を施す必要はないが、指導者自身の問題意識として、品詞の理解と語彙の意味・用法についての正確な知識の習得が求められることは言うまでもない。小学校段階では、これらを明示的に指導するのではなく、気づきを促すことを重視し、指導者自身が効果的な例文の作成を行うなど、きめの細かい工夫が必要であろう。

講座全体を通しては、ことばの生成と解釈は文脈を切り離しては存在しえないものであり、場面や状況を踏まえた英語理解・英語指導の重要性を強調し、形式と意味の対応関係としての文法の有用性についての認識を高めるように努めた。ただ、英語学という講座の性質上、言語科学的な分析や思考を必要とするため、必ずしも現場での実践に直結する内容ばかりを提供することはできなかった。透徹した論理に裏打ちされた英語学の研究成果を目の当たりにして、筆者自身、その鮮やかな謎解きに首肯することも多々あるが、英語学的な現実世界の切り取り方を小学校の教育現場にダイレクトに持ち込むことには慎重であるべきで、授業運営の要所で「隠し味」として上手く活用することの意義を述べておきたい。実際には、英語学の知見は、英語指導者の教養ないしは一歩進んだ英語の基礎力と位置づけられ、例えば、教材作成や教室での英語使用、また児童からの質問への対応の際に効力を発揮するものと期待したい。

Ⅲ. 英語文学研究との接点

1. 講座内容

外国語としての英語で書かれた文学作品は、英語表現の豊かさはもちろん、その作品が生まれた文化や社会、時代背景などを色濃く映し出すという点で、前掲した新学習指導要領に定める言語表現、文化理解、語彙指導のための教材として、さまざまな利点を持っている。一方で、英語で書かれた文学作品をそのまま小学校段階の英語指導の教材に使用するのは難しいのも事実である。

文学作品は大きく分けて、小説、詩、戯曲というジャンルに分かれているが、本講座では、英語ということばの成り立ちやイギリスの歴史と文学作品がどのようにかかわっているかを理解するために文学史を概観した後、歌詞を含む詩、短編小説、戯曲の一部を使用して、受講生に英語文学を深く読む経験を提供した。本稿では、詩を扱った回のなかから、聖書やシェイクスピアと並んで英米の文化に深く根差している英語の伝承童謡であるナーサリー・ライム(Nursery Rhymes)[注5]を用いた授業実践に焦点を当て、英語文学研究の知見を小学校段階での英語指導に取り入れる試みを紹介する。

2. 到達目標

本講座では、平成 27 年度に文部科学省によって委託された「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」で示された、「教員養成・研修　外国語（英語）コア・カリキュラム」に基づき、１）文学作品の英語表現を学ぶこと、２）文学作品に表れる文化や社会などの背景知識を理解すること、３）英米文学の代表的な作品を知り、その読み方を学ぶことの３点を目標とした。本稿においては、特に「小学校コア・カリキュラム」に示されている「マザーグース、絵本、児童文学」を中心にした講義を取り上げ、ナーサリー・ライムが英語の音声的な特徴（リズム、イントネーション、押韻）の理解に適した題材であることを示す。また、その講義のなかでは、ライミングを利用した語彙指導への応用を絵本を使って実践し、さらに英語圏の言語文化に深く根差したナンセンスという一種のユーモア感覚についても紹介し、異文化への理解の一助とすることを目指した。

3. 英語文学を用いた授業実践

ナーサリー・ライムとは、英語圏で広く親しまれている子どもたちのための詩である。英米の子どもたちは、幼いころから絵本や歌、手遊びやゲームなどでそれに親しんでいる。必ずしもメロディーを伴うものではないが、詩のリズムと脚韻（rhyme）によって特徴づけられるものである。『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures in Wonderland*)や『赤毛のアン』(*Anne of Green Gables*)、『指輪物語』(*The Lord of the Rings*)など、後世の児童文学作品に大きな影響を与えているだけでなく、新聞の見出しや CM、映画や店の名前に至るまで、さまざまな形で英米の社会に溶け込んだものでもある。もともとが子ども向きの詩である上に、「きらきら星」(“Twinkle, twinkle, little star”)や「メリーさんの羊」(“Mary had a little lamb”)、「ロンドン橋」(“London Bridge”)など、日本でもよく知られている詩も多いので、初めて触れる児童にも親しみやすいと考えられる。ここでは、授業の導入として手遊びや鬼決め歌などを使うだけでなく、音韻指導、語彙指導、異文化理解という側面から、ナーサリー・ライムの教材としての可能性を示す。

(1) 音声的特徴とライミング

英語の詩は韻を踏むことが多いが、押韻は文学作品のみならず、日常生活にもよく使われている。英語の押韻は頭韻(alliteration)と脚韻(rhyme)に大別される。例えば『ハリー・ポッター』シリーズ(*Harry Potter* Series)に出てくる **B**arty **B**ott's Every Flavour **B**eans や the **F**orbidden **F**orest、**M**oaning **M**yrtle や **T**ime-**T**urner などのことばは、すべて頭の音がそろえられた頭韻である。それに対してことばの後ろの音をそろえるのが脚韻であり、以下のようなものである。

Jack and **Jill** / went up the **hill** /to fetch a pail of **water**,
Jack fell ***down*** / and broke his ***crown*** / and Jill came tumbling **after.**

この例においては、Jill と hill、water と after、down と crown がそれぞれ韻を踏んでおり、さまざまなパターンはあるものの、同じ音が最後に出てくることが理解できれば、単語の発音が推測できる。例えば、“wool”という単語は、日本語につられて「ウール」と発音する日本人学習者が多いが、以下の例を見れば“full”と韻を踏むことがわかる。

Baa, Baa, black sheep, have you any **wool**?
Yes sir, yes sir, three bags **full**.

また、英語を教えるにあたっては、指導者は英語のアクセントリズやリズムに留意しなくてはならない。日本語と英語は音節構造が違っており、英語は基本的に母音にアクセントがおかれる。さらに、日本語はそれぞれの音節がほぼ同じ強さで発音されるのに対し、英語は強弱でアクセントをつける。英語の代表的なリズムを習得するのに英語の詩、特にリズミカルなナーサリー・ライムは最適である。CD などを使って一緒に何度も繰り返して口ずさみ、歌ったりしながら、英語のリズムと押韻を体で覚えることは、児童にとっても楽しく、英語の発音

指導に効果的である。

（2）異文化理解の題材として

先述したように、ナーサリー・ライムは子どもたちの遊び歌であるので、そのなかにはいろいろなジャンルがあり、手遊び歌、なぞなぞ、積み重ね歌、早口言葉など、状況に応じて楽しむことができる。「ロンドン橋」は有名な遊び歌であるし、「ハンプティ・ダンプティ」(“Humpty Dumpty”)は「たまご」という答えをあてるなぞなぞである。「笛ふきピーター」(“Peter Piper”)は早口言葉として有名であり、「クリスマスは 12 日続く」(“The First Day of Christmas”)は積み重ね歌（間違えないように少しずつ増えていくことばを覚えて繰り返していく歌）の代表である。リズムや遊びを楽しむことがナーサリー・ライムの第一義的な楽しみ方ではあるが、英米の社会に深く根差した作品であるので、ナーサリー・ライムはさまざまな形で指導を広げていくことができる。

例えば、伝統的な遊び歌としての「ロンドン橋」は、その謎に満ちた歌詞に潜む歴史的背景を話して昔の人々の暮らしと川の重要性に言及したり、ロンドンの地図を使った授業への展開も考えられる。また、「クリスマスは 12 日続く」は、クリスマスの意味について教える教材となる。日本ではクリスマスというのは 12 月 25 日だけをさすように考えられているが、キリスト教文化圏では、顕現節である 1 月 6 日がキリスト教の誕生という意味で、同じくらい大切だとされる。それは、ユダヤ教徒にとっての救世主として生まれたイエス・キリストが、1 月 6 日に東方の三博士の来訪を受け、それがキリスト教がユダヤ人以外にも開かれたこと、つまりイエス・キリストがすべての人類の救世主として降誕したことを祝う祭日となったからである。例えばフランスで伝統的にこの日を祝うために食べられているガレット・デ・ロワは、最近日本でも見かけるようになったが、そのような文化について触れる機会としてもよい。

「ハンプティ・ダンプティ」については、『アリス』に出てくる登場人物としても有名であるが、多くのイラストレーターが独自の解釈で描いた絵を紹介することが考えられる。児童たちにも自由に絵を描かせ、それをわかりやすい挿絵と比べることで、難しい語彙や表現をわかりやすくすることができる。

（3）ライミングと絵本

以上に述べたように、英語のリズムや押韻の導入としてナーサリー・ライムは非常に有益であるが、ライミングを絵本で楽しんだり、語彙指導に活用することもできる。ここでは本講座で取り上げた絵本のなかから、二冊を紹介したい。

クゥエンティン・ブレイクは『チャーリーとチョコレート工場』(*Charlie and the Chocolate Factory*)などの挿絵で有名なイラストレーターであるが、絵本作家としても人気がある。『マグノリアおじさん』(*Mister Magnolia*)は“Mr. Magnolia has only one **boot**.” “He has an old trumpet that goes rooty-**toot**--” “And two lovely sisters who play on the **flute**--”と、リズミカルな英語のライミングがユーモラスな絵とともに続いていく絵本である。文字が少ないので、ほとんど説明しなくても絵を見ながら楽しめる作品であるが、谷川俊太郎による名訳もあるので、日本語と英語で読み比べをしても面白い。

マーガレット・ワイズ・ブラウンの『おやすみなさい、おつきさま』(*Goodnight Moon*)は、アメリカでもガイディッド・リーディングに使用されている作品である。[注 6] 同じ部屋のなかを描いた絵が、ページが少しずつ進むにつれて暗くなっていき、最後には電気が消えている仕掛けになっており、その部屋のなかにあるものに“Goodnight”と呼びかけていく絵本である。その呼びかけが、“And two little **kittens**/ And a pair of **mittens**. And a little **toyhouse** / and a young **mouse**.”と韻を踏んだ仕掛けになっている。易しい語彙が用いられているので、例えば“kittens”と“mittens”のライミングに気づかせ、自然な語彙指導に役立てることができる。

ライミングやリズムに留意した絵本はたくさんあるので、英語の音の響きに慣れ親しむためにも積極的に活用することができる。

（4）ナンセンスの系譜

最後に紹介したいのは、ナーサリー・ライム特有のナンセンスの感覚である。これは一種のユーモアととらえることができるが、英米文化になじみがないと、そのおかしみを理解することは非常に難しい。ナンセンスとは

センス(sense、つまり「意味」や「分別」)がないということであるが、単なるでたらめな表現ということではない。以下のようなナーサリー・ライムがその例である。

Mother, may I go out to swim? / Yes, my darling daughter.
Hang your clothes on the hickory limb, / But don't go near the water!

「泳ぎに行きたい」という娘に対して「いいわよ」と母が答えたところで、読者は娘が泳ぎに行くのを許可されたと解釈する。しかし、その期待は最後の一行で見事にひっくり返される。当たり前だと思っている論理が逆転するところにナンセンスのおかしみがあり、例えばこの例では、文法上は全く問題がないにもかかわらず、論理的に破綻していることが重要なのである。ある文章の文法や語彙が適切であるにも関わらず、意味が通じないという不条理さが、ナーサリー・ライムには言葉遊びとして多く表れており、それが英語文化の根底に存在する。有名な例を挙げれば、イギリスの児童文学の代表的作品とされるルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』で、狂った帽子屋がアリスに出すなぞなぞがある。狂った帽子屋が"Why is a raven like a writing desk?"(どうして大ガラスは書き物机に似ているのか)と聞くので、なぞなぞ好きのアリスは一生懸命答えを考えるが思いつかず、降参して答えを聞こうとする。帽子屋はそれに対して、"I haven't the slightest idea."(皆目見当もつかない)と答える。なぞなぞには答えがあるはずだという分別、もしくは常識をくつがえし、作者は読者の期待を裏切り、不意を衝くのである。子どものための童謡であるナーサリー・ライムによって育まれたナンセンスの感覚は、このように深く英語圏文化のなかに根付いているのである。

4. 考察

以上のように本講座では、ナーサリー・ライムを中心にして、英語の音声やリズムの習得、語彙指導、さらには内容理解や異文化理解、そして英語文化の根底をなすナンセンスの感覚まで、知識を深められるということを示した。終了後に行ったアンケートにおいても、受講生からはおおむね好意的な評価を得ることができ、特にナーサリー・ライムや絵本などはすぐに授業に使ってみたいという声が聞かれた。

授業のなかで使いやすい長さ、語彙、楽しさなどの点においてもナーサリー・ライムはすぐれた題材であるが、小学校での英語指導という点においては、音声や語彙表現、さらには異文化理解を深めるための知識としても活用できる教材であるといえよう。もっとも英語文学の本当の面白さは児童文学にだけあるわけではない。本講座でも、詩では英語のリズムや形、比喩表現などを、戯曲では対話を通した人間関係の在り方などを、小説ではもっと深い異文化理解や歴史的、文化的背景などを知り、社会の多様性の在り方を考えるきっかけとしてもらった。ナーサリー・ライムで得られた興味や知見をさらに広げ、さらなる英語文学や異文化への興味、行間を読むことの面白さなどを味わうきっかけの一つを提供できたといえよう。

Ⅳ. 結語にかえて

本稿では、児童が英語コミュニケーション能力を図る基礎となる資質・能力の育成を念頭に置き、指導者自身がどのような視点を持つことが大切であるかという問題について考察した。

世界規模でのグローバル化が急速に進展する中、英語教育のあり方は実用と教養の観点から論じられることがあるが、日本のような EFL(English as a Foreign Language)の環境において英語コミュニケーション力を養成するためには、英語教員は、英語学研究や英語文学研究など、英語教育の隣接分野の知見を日々の授業に活用する工夫を凝らし、学習者の言語意識の高揚を図ることに寄与するように努めることが大切である。言語教育としての英語教育という意味では、言語現象を観察し省察する力、すなわちメタ言語能力を養うことも重要な視点である。また、英米の文化に深く根差している英語の伝承童謡や文学作品を深く読み込む試みは、異文化理解や想像力、共感力を育てるために最適であり、他者への配慮を含めたコミュニケーションの力を育成することに貢献

できる。

最後に、実際のコミュニケーションにおいて、メタ言語知識を有効な言語知識として活用することに成功し、コミュニケーションの場で一定の成果を上げることができれば自己効力感が生まれ、学習者の言語意識は一層高揚するであろう。このサイクルが繰り返され、結果として成功体験が積み重なれば、英語学習全般に相乗効果が生まれるものと期待したい。

注

1. 本事業は、文部科学省が実施する「小学校英語教科化に向けた専門性向上のための講習の開発・実施事業」の委託を受け、小学校等の現職教員が中学校教諭免許状（外国語（英語））を取得するための免許法認定講習である。

2. ここで「基礎」という文言が使用されているものの、その内容は決して基礎的であるとは言えない。小学校英語の言語活動として扱われる内容は、日常的で身近な内容とはいえ、「考えや意図を伝える」「相手の行動を促す」などの活動も盛り込まれ、中学校の学習指導要領と大差のないものとなっている。

3. (1) は what sport という 2 語が 1 つの構成素となって文頭へ移動している「随伴現象」(pied-piping)の例である。

4. 例えば、[More X]のように、特定の語を中核として変更を伴うスキーマを、認知言語学では「軸語スキーマ」(pivot schema)と呼び、この軸語スキーマから一歩進んで動詞（述部）を中核とする構文を項目依拠構文と呼ぶ（詳細については辻（2019）を参照）。fun についても、[X is a lot of fun]という一種の項目依拠構文として学習の定着を図ることが有益であろう。

5. ナーサリー・ライム(Nursery Rhymes)というのは主にイギリスでの呼び方で、アメリカでは同じものがマザー・グース(Mother Goose)と呼ばれる。日本でもマザー・グースという名前の方がよく知られているが、本稿では引用に、ナーサリー・ライム研究の決定版とされる *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes* を使用しているため、ナーサリー・ライムの名称を使用する。なお、本文中の引用はすべてこの版による。

6. ガイディッド・リーディング(Guided reading)とは、アメリカで英語を母語としない子どもたちに絵本を使って英語指導、文字指導をするやり方である。*Goodnight, Moon* を使ったガイディッド・リーディングについては『アメリカでは絵本で英語を教えている』(2011)に詳述されている。

引用・参考文献

Blake, Quentin (2010) *Mister Magnoli*a, Red Fox Books, London.

Brown, Margaret Wise (2007) *Goodnight, Moon*, HaperCollins, New York.

Carroll, Lewis (2009) *Alice's Adventures in Wonderland*. Oxford University Press, Oxford.

Crain, Steven and Diane Lillo-Martin (1999) *An Introduction to Linguistic Theory and Language Acquisition,* Blackwell, Oxford.

樋口忠彦ほか（編著）(2019)『小学校英語内容論入門』研究社、東京.

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2003) *The Cambridge Grammar of the English Language,* Cambridge University Press, Cambridge.

文部科学省 (2017a)『小学校学習指導要領』.

文部科学省 (2017b)『小学校学習指導要領解説　外国語活動・外国語編』.

文部科学省 (2017c)『中学校学習指導要領解説　外国語』.

文部科学省 (2018) *We Can! 1, 2*（小学校外国語（第 5，6 学年）用教材）.

Opie, Iona and Peter (1997) *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, Oxford University Press, Oxford.

東京学芸大学 (2016)「教員養成・研修　外国語（英語）　コア・カリキュラム　ダイジェスト版」　英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業．平成 27 年度報告書.

辻幸夫（編）(2019)『認知言語学大事典』朝倉書店、東京.

リーパーすみ子 (2011)『アメリカの小学校では絵本で英語を教えている』径書房、東京.